

「兄上」

声がした。美である。

「おお、息災であつたか？」

しかし、美は義豊の頬を叩いた。

「小さい……ガキと同じです。誰のための棟梁か、まったく考えていません。あなたは救いようもなく、小さい！」

「美！」

「叔父を討つて喜ぶのは、自身だけではありませんか？ 領民が本当に喜びますか？」

「喜ぶに決まつておる」

「それが分からぬから、小さいのです。二統の時節も読むことなく、ただ自我の儘に理性を失うとは何事か」

「里見家百年の将来のためには、二統は必要なり」

「頭のよすぎる御方には、足下がとんとお見えではない由。どうか滝田城を巻き込むのはご容赦ください。我が夫を巻き込むのは、おやめください」

「美、おまえは……」

「我が夫は大きな男。民を慈しみ、戦さより土に触れることを好む在地の大きな男。つまらないことで夫を巻き込むのは、どうかやめてください」

その険しい眼差しに、義豊は何も云えなかった。

「また、くる」

そういつて立つ義豊の心の奥は、まだ何かか燻っていた。

二日後、由々しき報せが義豊の耳に届いた。

久留里城には、権七郎義堯がいなかったというのだ。造海城の真里谷丹波守信隆に招かれて不在なのだという。

討ち洩らした。

奇襲こそ大事であつたものが、損なつたというのか。

「奴には、妻も子もいただろう」

その問いに、本間八右衛門は額の汗を拭いながら

「正妻ともども、側室の郷である土岐弾正の万喜城へ赴いており……」

「ならば、万喜城へ兵を差し向けよ」

恐れながらと、本間八右衛門は平伏した。

「夷隅郡は里見領に非ず。土岐弾正を敵とするのは、如何かと……」

「権七郎は造海城というたな。そこを攻めなかつたのか？」

「そこは真里谷領です」

里見義堯を招いたという真里谷丹波守信隆は、信保の嫡男である。些か父子の仲が悪くなつていと聞くが、たしかに義堯ともども討ち取つては、小弓公方への聞こえが悪くなる。

ここへきて、雲行きが怪しくなつてきた。

そのことを懸念し始めた義豊は、遠巻きに造海城を包囲するよう命じた。

「それでは……」

「案ずるな。真里谷丹波守と離れさせずれば、すぐにでも討ち取れるだろう」

義豊の下知に、本間八右衛門は従つた。

その頃、造海城に稲村城での出来事が伝わっていた。

「里見の本家の、なんと無道！」

父を殺された義堯は、齒軋りした。ここには正木通綱の次男・弥九郎時茂も義堯に従ひ同席していた。正木通綱の死も伝わり、時茂は涙を堪えて俯いた。

「これは、なんとお声を掛けてよいやら」

真里谷信隆は当惑した。

やがて、岡本城からの急使が造海城を訪れ、義堯に思いも寄らぬ沙汰を報せた。

久留里城と山之城に義豊が軍勢を差し向けたというのだ。久留里は妻子が留守になることを承知していたが、山之城には正木一族がいる。こうして造海城にすることで、ふたりは兇刃を逃れた。しかし、逃げられない者もいるのだ。

正木時茂が山之城の様子を訊ねると、使者は

口早に

「糟谷石見守の軍勢が囲んでござる」

「守り手は誰か」

「御舎弟様にごさる」

「兄はいかがした」

「弥五郎殿は左衛門佐（里見実堯）様の留守を預かり宮本城におりました。そのまま、不意打ちで」

「くそ、なんてことだ」

その様子を静かに聞いていた真里谷信隆は、ゆっくりと立ち上がった。

「二人とも、是非にも父の仇を討つべし。我も力になろう」

真里谷信隆は妾腹の生まれだ。のちに嫡流の弟が誕生したことで、父・信保とはすっかり反目していた。そのため内々に北条と通じていたのだ。

「真里谷の家督は儂が握る。これで小弓公方を後ろ盾にできよう。そのうえで北条を頼って加勢を求めるのじや。里見の統治がこのように不様では、領民が可哀相というもの。権七郎殿は父の仇を討ち果たして、どうか里見の跡を嗣ぐべし」

「そんなことを」

「このままでは、そなたも殺されてしまう。犬死にだわ。悔しくはないのか」

「丹波殿」

「儂は父を討ち、真里谷の実権を取る。むざむざ弟に家督を奪われてなるものか。我らは互いの盟約を結ぼうではないか」

躊躇する義堯に

「そうあるべし」

と勧めたのは、正木時茂であった。父の仇討ちという大義名分は、彼にもある。

「権七郎殿、我らは在地の海賊衆を掌握してござる。これは里見の命綱にて、これを握る限り、決して戦さに負けますまい。我らに賛同する者も在地におります。これを集い、戦いましょう」

数日もの間、簡単に動こうとしない義堯を、正木時茂は根気よく説得した。

そうこうしている間に、義堯へ味方する者たちが続々と造海城へと馳せ参じてきた。

「権七郎殿、如何に当主といえども、理不尽は

許し難い」

「如何にも！」

「左衛門佐殿は我らの声にもよく耳を傾けてくれた。あのような殺され方をしてよい人物ではねえつぺえ！」

在地豪族を中心とした彼らは、口々に義堯へ挙兵を促した。

そのなかには義豊の子・又太郎もいた。十十十

犬掛へ（3）

夢酔 藤山